

令和2年度福岡市博物館協議会 議事録

日 時	令和3年3月5日（金）15時00分から17時00分まで
場 所	福岡市博物館 講座室1
出席者	福岡市博物館協議会委員 11名 福岡市博物館 10名
議 題	(1) 会長・副会長の選任について (2) 福岡市博物館の事業について ①平成31・令和元年度、令和2年度事業報告 ②令和3年度事業計画

1 開会

事務局 委員の過半数以上出席であり、本協議会は成立している旨を宣言。

総館長 開会あいさつ

2 議題

(1) 会長・副会長を選任

(2) 平成31・令和元年度、及び令和2年度の事業報告
令和3年度の事業計画を説明

3 質疑応答

以下のとおり

委員 平成30年から令和元年にかけての、利用者数の推移が非常に大きく伸びている一番大きな要因は何か。

事務局 平成30年から令和元年度に、利用者数が大きく伸びているのはおそらく、40万人近い観覧者数を数えた特別展の影響と考える。

委員 職員数は39名とあるが、これは市職員数か。

事務局 市職員と会計年度任用職員の合計職員数である。

委員 寄託寄贈者は福岡市民に限定していないと理解して良いか。

事務局 寄託寄贈者は福岡市民だけとは限らない

委員 文化財の指定についての基礎調査は市の教育委員会と一緒にしているのか、個々で行っているのか。

事務局 博物館と福岡市の文化財活用部と一緒に調査等を行っている。

委員 環境保全で開館時・閉館時の点検ということだが、温湿度は常時点検を行っているという事で良いか。記録を取っていないのか。

事務局 常時点検を行っている。

委員 燻蒸はどういった方法で燻蒸しているのか。

事務局 燻蒸については、一定量たまった段階で燻蒸窯を用いて行っている。

委員 資料修理件数が増減しているが、作品によって増減するという事か。

事務局 どれを燻蒸するかによって、だいたいの数が変わっている。

委員 特別閲覧について、何か閲覧制度の資格とかあるのか。

事務局 当館の場合は特に資格等は問わない。申請後に問題ないと判断できれば許可を出している。

委員 こども博物館の中で封泥体験というのがある。

委員 金印の一つの大きな目玉なので、大人にも封泥を体験してもらいたい。

委員 博物館利用者数について、子どもたちがどれくらい利用しているのか資料はあるか。小・中・高校生が、どれくらい利用しているかわかるか。

事務局 常設展示の観覧者に関しては、小中学生が無料なので、正確に把握できない。学校の校外学習としての入館は把握できるが、それ以外は把握できない。

委員 子どもたちが、博物館を日常的に利用するようになって欲しい。

委員 子どもたちは来館しやすい雰囲気になると考える。

委員 企画展は、博物館や資料館を使う学習でガイダンスができる部分を入れると、子供にとって親しみが湧き、困ったときに博物館に行けば何か教えてもらえるとか、アドバイスがもらえるという感じになることが必要と考える。

事務局 どこの博物館でも教育普及の重要性は認識している。

委員 我々も教育普及の職員と一緒に充実させていきたいと試行錯誤している。一つの試みとしては市史編さん室で、ブックレット刊行を計画している。

委員 当初は、子どもが読んで楽しいものを企画していたが、実際に先生たちに

リサーチしたら、地域、特に学習指導要領に3年生で、地域のことを学ぶ事が繰り返されているが、ブックレットの編さんにあたって、市史の刊行物として、子どもが地域のことを学ぶときに、周りの大人と一緒に学ぶ際の導きとなる大人型参考書として、市史の刊行物を企画している。

事務局 ブックレットを学校や公民館でも活用できることを手始めとして考えている。学校とか、地域の子どもを取り巻く環境に対して、自分たちも情報を得て、連携していきたいと考えている。

委員 教育普及で、令和元年度と2年度の、小学校の申込校数が、72校、75校であるが組織図を見て、出前学習としては人が少ないということは分かったが、この校数が限界なのか、もっと依頼があったら対応できるのかというところを聞きたい。

出前学習を博物館だけで賄うことは限界があるので、市民にサポーター的に手伝ってもらおうという仕組みをつくれなにかと思った。

事務局 出前学習に関しては、時間に余裕をもって行うため、1日の受入校数を1校と限定としているので、日程がかぶる学校には日程変更を依頼しているが、調整がつかない学校は殆どない。

今年度に関しては、コロナの影響で団体作業を遠慮する学校が多く見受けられ、学校側も生徒に配慮したところで、この申込数だったと考えている。

事務局 学級数が多い学校に出かける日には、担当3人のほかに、当事業の経験者に応援に来てもらっており、学年で一括して引き受けている。

今、市内にあるミュージアムとかの教育普及スタッフとの連携や情報交換する機会を作るよう心がけているが、館外から協力を得るということも、考えていきたい。

委員 色々な委員会や諮問に出るが、立てた目標を評価するのをこういう場で行うことがあるが福岡市博物館は何故そういうことをしないのか。

事務局 いろんな博物館において目標を立て自己評価や外部評価を行っている事は承知している。まずは、「ミッションステートメントという形で、目指すところを作っていく」ということについて現在作業中である。

ミッションを策定した上で、ステートメントとして一般に公表し、中長期計画を立て、それに基づく評価を行う様意識している。

資料に、リニューアルに向けての基本構想を開始する予定として記載しているが、その点を踏まえる前提として、まずはミッションがきちんとできるところに持っていきたい。

委員 大きな物語があって、これからの状況をどうのようにマイナーチェンジしていくかという議論を行うべきである。

そこにコロナがあるから仕方がないという話をしたら、人が来なくなりつ

ぶれて行く館も出てくる。そうすると来館者が減少し、ゼロに近づけば博物館は必要ないのではという不安が当然出てくる。

それを打ち返す強いメッセージを発信しないと、博物館はあって当たり前な存在ではなくなってきている。それにコロナの状況が拍車をかけている状況なので、博物館が持っているステートメントとかその立場を明確にし、こういう場面で話すような場を作っていないと、厳しいと思う。

また、自主企画展の侍展を見たが非常に面白かったけども、自分の感覚では、侍というのは『弓とり』とか『弓馬の道』というぐらいのものであって、『弓と矢』という世界が結構大事なはずだと思うが、昨今の刀剣ブームに便乗しているのか何か知らないけど、刀剣と甲冑だけで侍は語れないというのが正直なところ。やはり馬とか弓矢だとか『打ち物』がない部分に目を向けていくように誘導していくのが博物館の使命じゃないかと思う。

事務局

『弓。』刀剣と比べたら弓が強い。2001年以前の展覧会にもあったがその時代の弓矢が無いのが事実。基本、現物を出して展示したいというのがあり、あえて時代の下った、同じ形式のものを出すというよりも、刀と甲冑に特化したという事情がある。そういう中で、その歴史展示として、美術展として、歴史の展示として企画して、その『甲冑と刀剣』が、『守る方と攻める方』が、どう使われながら、時代の変遷ということで。甲冑は江戸時代の武士もちゃんと持っているが桃山時代で線を引いた。それは甲冑が戦う道具として機能していた時代というのが桃山時代で、江戸時代で実践がはなくなると甲冑はデコレーションにはしるようになる。それまでは、如何に身を守るかという、戦うため・守るために形態が変化してきたが、そういう動きを平安の半ばから、甲冑は派生していて、所謂鎌倉の時代から実践の桃山時代までの変遷を。刀のそり方と言うのも、時代に応じて変わる、それを併せて展示した。

それで、肝心の弓はあえて展示から外したところである。

委員

今後オンラインコンテンツ化するということは、世界中から誰もがみれるようになり、PIXR やアベンジャーズとかでは世界中の人は飛びつかない。

福岡・日本ならではのコンテンツをいかに発信していくか、オンラインコンテンツをどんどん出していった時に、誰へのリーチなのか、評価、仕組みづくりも大切だが、オンラインコンテンツの配信に関して何か検討を始めているのか。

事務局

今年度、オンラインコンテンツと言いながら実際にはユーチューブで動画を出したり、何の整理もせず手持ちのパソコン等で行ったのが現状。

規模を拡大しての環境づくりは、積極的には行っていないが、大きな可能性を感じているのが、病院の中にある学級（院内学級）の方から、オンライン学習を行いたいとの申し出があった。福岡市域には離島も含め一つの学習方法

としてオンラインという手段は、積極的に考えていきたい。

委員 先ほど外部評価について発言があったが、外部評価は簡単なものではない。協議会と外部評価委員会とは、分けて考えねばいけない。

また、来館者数が少ないから博物館は駄目という論議は考えてはだめだ。

また、外部発信を行うということがあったが、これには多言語化とかとかも考えなければいけないので、予算要求を行い人員も要求して、計画・準備を十分行ったうえでないと実行できないと思う。

事務局 先ほどの件について、外部評価が如何に大変かということは、理解しているが、まずはそういった方向に進む気持ちで、まず中長期計画というところを、設定するというのが最初に成すべきことだと思っている。

まずできることは、それを基にした内部評価の部分、そういったところまでは、何とか我々としても、進めていくような形をとりたいと考えている。

委員 一番気になったのは、博物館に寄付金が挙がっていること。

寄贈をしてくれる方々に対して表彰があったり、招待があったとしても、これから寄贈する方々、それから過去に寄贈された方々に関して、コミュニケーションをとるセクションが、博物館の中にあるのかと思った。

例えば海外にも家族がいるが、たくさん遺産を持って海外に来ていて、親が亡くなった時に、この遺産をどうしようかと。その遺産をもらって、博物館・美術館がかなりのケアをする。で、彼等・彼女たちは、そういうコミュニケーションをとって、博物館とか美術館と関わりを持つことで自分の教育になる、社会的貢献にもなる、それを見て、大人たちが育っていくというような流れがあるので、福岡もそういうことが少しできればと思う。やはり情報発信というところだが、何か行ったことに対して買ってもらう、人に来てもらうというところに、予算も人手もかけるべきと思う。

業務でいろんなリサーチを行うが、そういう時に『歴史』『博多』とか検索をしたときに、今回の資料に載っているような情報は引かかってこない。

ウェブサイトを見るとPDFは挙がっているが、PDFの中を開いて、自分で検索しないと調べたいモノが掲載されているかわからない。編集の方法を少し変えると中身の情報がもう少し届くようになって感じた。

委員 グランドホールの大階段、特に降りるときに怖いという声を聴く。

そこに優しさがあっていいのにと、階段を見るたびに思う。

事務局 予算書に掲げている寄付金は、福岡市全体のふるさと納税寄付金である。

資料の寄贈・寄託者に関しては、非常に密に関係が続いている。頻繁に連絡をいただく方もある。

博物館は大きな建物だが、意外に上下の移動に、ご不便をおかけしている点で、以前からエレベーターのこととかは検討されているし、基本的な機能

に関してもより充実させていくということは、財政状況が厳しい状況の中で非常に検討の優先順位が高い案件として考えている。

委員 資料に小学校で、このコロナ禍のなかで、こんなに伸びているというか、一日一校という限界があるということだが、子供たちがこんなに望んで需要があるのであれば、作り上げていって欲しい。

資料に令和3年度事業計画に『博物館リニューアルの目的に、歴史資源を活かした観光拠点としての』という、この“観光拠点として”はどう考えたらいいか尋ねたい。

事務局 学校に出かけて、いろいろな体験型プログラムを提供するのが伸びていて、充実させていきたいと思っているが、今の仕組みの中で人員を増やすということは、厳しい状況であり、様々なネットワークを作っていくことが今後の課題と思う。

リニューアル基本構想で、今後、博物館にどういう機能を持たせるかということに関してかなり検討を行う中で、様々な将来像があるが、令和元年6月に福岡市の文化芸術振興計画というものを策定・公表しており、文化振興セクションがいろんな先生方の意見を聞きながら策定し、パブリックコメントもとった、きちっとしたオーソライズされたもので、そこに『心豊かに文化芸術を楽しむまちづくりで、地域の歴史文化等保存継承を施策方針』、『文化芸術が都市の魅力、価値となる、まちづくり』としており、『歴史文化等をいかした観光集客の促進』という体系立てた計画が先行してあるので、こういった理念というものになるので、この施策目標1とそれに伴う施策方針。施策目標2とそれに伴う施策方針に対応するようリニューアルの目的を、2項目を立てているという状況である。

委員 これまで博物館は観光と全く反対のところにあるような流れだったが、人を集めることは大変なことなので、いかに的確に必要な時に届けていくかということが、大事だと思う。

資料に侍展で、旅コラボ企画で、旅行会社とコラボして集客したとあるが、博物館からのアプローチか、先方からアプローチがあったのか、こういう企画は集客の大きなコアになるので興味深く感じた。

事務局 旅行会社からのアプローチで受けた。

以上